

2017年5月21日(日)

説教:「いのちの呻き」

聖書:ローマの信徒への手紙8:18~30

今朝の箇所は、“いのちの呻き”について記している。この手紙を記したパウロは、「いのち」についてフィリピの手紙で「キリストは私の生命である」と言い、またコロサイの手紙では「われわれの生命であるキリスト」という表現もしている。そして福音書においてイエス・キリストご自身が、「わたしは復活であり、命である」と宣言する。すなわち、いのちは全てイエス・キリストに通ずるということであり、私のいのちの中にキリストが居られ、私のいのちはキリストのいのちであるということである。さらに動物や木々、草花も全てはキリストのいのちに通ずるということである。

そしてこの箇所には三つの「いのちの呻き」について記されている。「被造物の呻き」(19、22)、「私たち(キリスト者)の呻き」(23-25)、「霊の呻き」(26、27)。これらの呻きは何を意味するのか？ このことは、私たちは呻きを発しているということであろう。この世に生きるということは呻きを伴うということである。逆に、呻きを伴わない生き方というのは、いのちに向き合わない歩みをしているのではないか。他者のいのちにも、自分のいのちにも向き合わない歩みをしているのではないか。私たちの呻きは聞かれているのである。

沖縄の呻きが聞こえてくる。辺野古の海の呻きが聞こえる。日に日にトラックに積んだ土砂が運ばれ、海に放り込まれて行く。海の魚やジュゴン、ウミガメの呻きが聞こえてくる。サングの呻きが聞こえてくる。連日、辺野古キャンプシュワブゲート前で座り込みをされている方々の呻きが聞こえてくる。一日でも一時間でも、一分でも工事を遅らせようと踏ん張って、座り込んでいる方々の呻きが聞こえてくる。

“いのちの呻き”が聞こえてくる。全てのいのちは、イエス・キリストに通ずるもの。キリスト教会は、このいのちの呻きを聞いているはずだ。聞かなければならないはずだ。もし、聞いていない教会があるならば、それは教会と言えるのか。私たちキリスト者は、「“霊”の初穂をいただいている私たち」は、目に見えないものを望んでいくことがキリスト者であるという。私たちは既に、目に見えないイエス・キリストを信じている者で、当然、目に見えないものを、忍耐を持って待ち望むべきである。もちろん、「待ち望む」といっても、ただぼ一つとして待つのではない。私たちが置かれたところで声を上げ、行動を起こして行くことは当然のこと。平和はつくり出すものであるとイエスがおっしゃっているのだから。

辺野古に新基地を造らせないという希望を、忍耐を持って持ち続けよう。そこにキリスト

に通ずるいのちがあるのだから。(神谷)